
箱庭賛歌 - ボーイ ミーツ ひきこもり -

伊戸空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

箱庭賛歌 - ボーイ ミーツ ひきこもり -

【Nコード】

N4097I

【作者名】

伊戸空

【あらすじ】

少年が出会ったのは、妙な性格をした、いわゆる「ひきこもり」な同級生だった。

これは、一人の少年と一人の引きこもりが過ごした日々を描く、ただそれだけの物語。

プロローグ（前書き）

製作途中ですが、よろしければ読んでいってやってください。
ちよこちよこ修正していくつもりです。

プロローグ

総理大臣でも大統領でもFBI長官でも、結局の所一人で出来る事なんてたかが知れている。ましてそれがただの高校生ともなれば、出来ることより出来ない事の方が多いのは当然の事だ。

ただ、ただそれでも何とかしたいと思った。何とかしようと努力した。そうして必死に足掻いて……結局は失敗した。

「引きこもり、ですか？」

「そ、引きこもり」

「えーと……」

「だから、引きこもりだって。同じ事何度も聞かないの。それともアレ？君、耳か頭のどっちか悪いの？」

繚乱と咲き乱れていた桜の花びらが変色し、冷蔵庫に入れっぱなしにしたまま忘れ去られたエビの様な異臭を放ち始める。そんな、俳人が詩的な美しさを見つけるのに苦労するだろうな、などと、大して重要ではない事を考えてしまう時節。杉野修一は、放課後に何の脈絡も無く呼び出された職員室で、高校に入学して初めてのクラス担任である鈴木朝子（四十代前半）の口から、メディアに刷り込まれて聞き覚えはあるが、しかして別段親しみの無い言葉を聞かされていた。

「……それで、その引きこもりがどうかしたんですか？」

微妙に失礼な教師の言葉を聞かなかった事にし、この教師のが何を言いたいのかを探るべく会話を続ける修一に対し、朝子は生徒の出

席簿をパラパラとめくりながら気だるげに答える。

「うん。ウチのクラスにいるのよ、引きこもり。略してヒッキー。ほら、教室の後ろの方の席、いつも一個だけ開いてるでしょう?」
言われて修一は、まだ学生として数ヶ月しか過ごしていない自分の教室の情景を思い出してみる。

「ああ、そういえば……」

すると、確かに修一の記憶の中の教室には空席が存在していた。入学以来いつも空席となっている上、何故か教師が欠席の事を、まるで存在自体を無いものとするかのように口にしていないので、思い出すのに時間がかかってしまった。

「それでね、杉野君には今日その子の家にプリント届けて欲しいのよ」

「は?」

思い出した途端に告げられた朝子の唐突な申し出。理解が追いついていない修一に構う事無く、結婚適齢期を十年以上前に通過した女教師は続ける。

「ほら、今日って学校に提出する必要がある書類が沢山配られたじゃない? そういう書類は、いつも私のが届けてるんだけど……何か、今日は職員会議が長引くみたいなのを教頭先生が言ってたのよ。それで、あんまり遅くなつてから家に行くのも迷惑だろうから、その子の家の一番近くに住んでる杉野君に行つて欲しいって訳」

「あー……えーと、つまり俺はその引きこもりのクラスメイトに、プリントを届ければいいんですか?」

「そういう事ね。頼める?」

自身のこめかみを揉みながら聞き直す修一に、朝子は特に悪びれる様子も無く、机の上に置かれた湯気の立つコーヒーを飲みながら答えた。

「……はあ。分かりました、届けますよ。今日は特に用事もありませんし」

本当の所を言えばそんな面倒な事はしたくない修一だったが、わざわざ担任に悪い印象を与える事もないだろうと考え、少し考えた後に頷いた。それを見た鈴木朝子は満足げに頷くと、

「はい、じゃあこれその子の家までの地図とプリント。」

修一に問題の「引きこもり」生徒がいる家までのやや汚い地図と、渡すべき真っ白なプリントを手渡した。まるで、何かのチケットを渡すかの様に。

それが一時間前の話。そして現在、杉野修一は道に迷っていた。

その道は、静かで、そしてとにかく人がいなかった。傾いた太陽は半分以上顔を沈め、辺りの空間は殆ど夕闇に侵食されてしまっている。

そんな和製ホラー映画のワンシーンにでも使われそうな場面、夕暮の住宅街を修一は、一人学生服の肩を落としながら、とぼとぼと歩いていた。

「家の近所にこんな場所があったなんて……というか、この年齢で家の近所で迷うなんてな……」

俯き呟いたその表情にあるのは、それなりの自己嫌悪と、若干の疲労。

朝子に渡された地図を何度も見返しながらここまで歩いてきた修一だったが、その歩いて来た道は、曲がり道や分かれ道が異常に多い

袋小路で、初めの内こそまともに歩けていたものの、歩き続ける内にととうとう自分の現在位置が解らない状況まで来てしまったのだ。誰かに道を聞こうにも、周囲を風が吹き抜けるだけで人の影など全く無い状況ではどうしようもない。当然の事ながら、最初の目的であるプリントすら届けられていない状態だ。

「……あー！畜生！もうやめた！帰る！！」

故に、そんな精神肉体の両面から疲労が確実に蓄積してく状況に陥った修一が、自己嫌悪を何かしらの怒りに変換して叫ぶまでには、そう時間は掛からなかった。

「そもそも、俺がこんな事をする理由なんて無いじゃないか。ひきこもりだか何だか知らないけど、そいつが普通に学校に来てればこんな余計な時間は使わずに済んだ。つまり、プリントを届けられないのはそいつが悪いんだ！そうに決まってる！」

言い訳じみた情けない言葉を吐いた後、修一は八つ当たりの様に道端にあった石ころを力いっぱい上へと蹴り上げ

「痛っ……何をするんだ君は」

「へっ？」

直後に聞こえてきたのは、凜とした声。修一は慌てて周囲を確かめるが、しかしそこには夕闇と腐った桜の花びらがあるだけで、人影などは存在しない。一頻り首を捻り考えた後、修一は深呼吸を行い、

「……やれやれ、疲れてるんだな。俺」

「過労気味のサラリーマン様な台詞を言っている所悪いが、君から見て右側にある家の屋根を見て欲しい」

「っ！？」

またしても聞こえてきた声にそう言われた修一は、反射的にその声が指示した場所を見る。するとそこには

「……やあ、学生君」

屋根の上には少女がいた。消え去る寸前の夕日を受け、まるで絵画の様に、青い屋根の上へと座っていた。

こうして少年と少女は出会う。

この二人の出会いは、お互いの人生を大きく変える物となるのだが
それがどの様な変化なのかは、まだだれも知らない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4097i/>

箱庭賛歌 - ボーイ ミーツ ひきこもり -

2010年10月28日06時32分発行